森鷗外「審美学」の研究（1）——序説

浜　下　昌　宏

Summary

A Study on Mori Ohgai's Aesthetics (1) ——A Preliminary Note

Masahiro Hamashita

Ohgai's massive and admirable accomplishments include the translation of contemporary works of German aesthetics and the critical works based on the theory he absorbed from them, both of which must have contributed to the historical development of Japanese aesthetics after the Meiji Restoration. The aim of this series of research is to trace those aesthetic studies by Mori Ohgai (Mori Rintaro), and to assess his role in establishing aesthetics as an academic descipline in Japan. The content of this research will be (1) introduction and bibliographical notes, (2) close examination of his translation of some of German aesthetics, (3) interpretation of Ohgai's critical and aesthetic works. This paper treats (1) introduction and bibliographical notes as a preliminary research. What is remarkable about Ohgai's aesthetic studies are as follows: 1) his terminology or coinage of aesthetic terms, 2) his way of translation by summing up original texts, 3) his high-spirited activity in the field of criticism against his contemporary reviews and art works, 4) his lectureship on aesthetics at Keio Gijuku and Tokyo Art School, and 5) his high estimation of Harada Naojiro with whom he was acquainted while he stayed in Munich. I would like to continue this research with those points in mind.

日本の近代美学は，西洋の美学の“翻訳”から始まった。しかし，そもそも「美学」は翻訳可能なのか？　その問題は，一般的な文化の翻訳可能性という問いとも関わる。学問体系や概念の訳語作りは可能であっても，美意識は翻訳できるのか？　異文化，異国情緒への憧れと模倣はあるだろう。しかし，自国の文化にそれに対応し，したがって翻訳できるものがないからこそ，そうした憧れと模倣の衝動が生じるのではないのか？

もとより，洋学の一環としての日本の近代美学は，西洋の美意識の摂取から始まったのではない。西洋近代において哲学的に体系化された講壇的美学の翻訳からそれは着手したのであった。つまり，概念的に整理された用語を観念整合的に理解し，適切な訳語を与えることが，日本の近代美学の出発点であったのであり，その役割を担った第一人者が西周であった。むろん，「蘭，英，仏の諸国語に通じ，又漢学の素養があった。・・・それで氏は訳語を鋳造するに頗る巧妙」（井上哲次郎）[1]，であったことは事実であり，さらにそのような語学力や漢学の知識さえあれば，基本的思考・体系の構造を異にする異質の文化の精華を容易に転移することができるというのでもない。とりわけ人文学の場合，「本邦従来性理ノ書ヲ訳スル甚ダ稀ナリ。是ヲ以テ訳字ニ至リテハ固ヨリ適従スル所ヲ知ラズ。・・・其指名スル所モ自ラ他義アルヲ以テ，別ニ字ヲ選ビ，語ヲ造ルハ亦已ムヲ得ザルニ出ズ」（西周）[2] という苦労は今日の我々には想像できないものがある。にもかかわらず，先駆者の評価は無知・無理解に基づくことがあって，たとえば西周たちの努力は「むしろ暗中模索のうちにヨーロッパ美学を輸入しようとする，文部省主導の西洋学奨励策の上に乗った動きであったといふ外ない。それ故にまた美学が本来的にさうであるべき，当時の日本人の美意識との関はり合ひ等は眼中に無かった」，「西洋学の輸入に対して，明治初期の芸術思想の中に，いはば内発的に新しい美学を打ち立てるべき機運があつたかといへば，これも殆ど無に等しい」[3]，と論じられたりもする。こうした理解は，一見説得力がありそうでありながら，実は皮相な見解でしかないのである[4]。

森鷗外の美学的著作活動への我々の関心は，上述の難点を克服する方向に彼を位置づけようとする問題意識に由来する。近代美学の先鞭をつけた西周と私的にも縁の深い[5]森鷗外についてとくに注目すべき点は，彼は西洋美学を摂取しつつそれを我がものとして日本の文壇や芸術の事情に即して適用していることである。

鷗外は晩年にみずからの思想的美学的関心の歩みを回顧して，彼は自分の訳出したゴットシャル，ハルトマン，フォルケルトを「仮の足場」として明治文壇に対して臨んだと言い[6]，また社会的態度についてはファイヒンガルの哲学から学んだように思われる（「かのやうに」「妄想」ほかの作品を参照のこと）。それを可能にしたのは，むろん鷗外の天分・素養に加えて，留学体験による西洋文化の内在的理解があったからであろう。「しがらみ草紙の本領を論ず」において，鷗外は「西学の東漸するや，初その物を伝へてその心を伝へず。学は則格物窮理，術は則方技兵法，世を挙げて西人の機智の民たるを知りて，その徳義の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや」[7] と言う。そして，それゆえにこそ，西洋文化・思想の日本への適用について

も基本的立場を自覚している。「論者或は曰く。今の小説を論ずるもの，多く標準を西欧諸国に取る。その論證愈博くしてその意見愈狭し。寧これを常識に徴することの確なるに若かずと。余等は此般の言を聞く毎に，未だ曾て剖斗折衝の政に想到らずんばあらず。若論者の意を弘めてこれを言はば，啻に審美学と其一部なる詩学とのみならず，道学も哲学も悉くこれを常識に徴して可なり」[8]。鷗外は自分の学んだ洋学・ドイツ美学を，近代日本に生きる自分の反省的自覚によって相対化し活用する。その精華は著述において見事に示され，ゴットシャルに依拠して「小説論」（明治22年１月）を発表した後，主にハルトマンの立場を踏襲して，明治22年から24年にかけ，巌本善治との「文学ト自然」論争，石橋忍月との「舞姫」論争や幽玄論争，外山正一との画題論争，などを展開する。そして明治24年から25年にかけては坪内逍遙との没理想論争（別名，記実・談理の論争）に関わる。

日本近代美学史研究の一環として，我々の鷗外研究のねらいは，森鷗外における西洋美学の翻訳紹介と彼の美学理論・芸術論との関連を探ることにあるが，本稿はその準備のための序章である。

日本の近代美学史において森鷗外が果たした功績のなかで，特に注目すべきは次のようなことである。

1）まず，彼の「審美論」「審美学」という語法である。いうまでもなく〈aesthetics〉の翻訳語として「美学」という用語が今日の漢字文化圏（中国・韓国・日本）で定着している。東洋の漢字文化圏では，その翻訳語以前に「美学」に対応する学問がなかったわけである。明治以降の日本の近代美学史は，洋学美学の翻訳と定着の歴史であった。翻訳された専門用語の定着，および，学問としての定着，学界の創設と定着・発展といったことが，日本の近代美学の歴史であった。そして，まず〈aesthetics〉の訳語を確定するに際して，西周（「善美学」「佳趣論」「美妙学」ほか），中江兆民（「美学」）らの苦心があった。それぞれの訳語には，概念的理解のちがいや解釈が込められていた。その中にあって，鷗外の場合は「審美論」「審美学」という訳語を採っている。その論理的根拠はいかなるものであったのだろうか。

さらに，鷗外自身の美学研究・芸術的評論活動の足跡にも注意が払われるべきであろう。

2）まず，彼はハルトマンほかのドイツ美学書の翻訳紹介を試みている。それは，完全訳ではなく，訳述・抄訳であるが，そこにおける彼の訳語法，要約の仕方の特徴を確認しなければならない。

3）その一方で，評論や創作における活動を精力的におこない，上記のような論争にも積極的に関わり，そのつど彼の美学的立場・美意識を表明している。その子細を解釈することも我々に必要な作業である。

4）また，鷗外自身，学生に対して美学の講義を行っている。明治25年（1892）９月より，慶応義塾に審美学の講師として鷗外は出講している。さらに明治31年（1898）には東京美術学校で「美学論」を講義している。（同じ頃，早稲田大学の前身の東京専門学校でも，東大における最初の美学専攻の卒業生である大塚保治を招んで美学の講義を受け持たせている。）その講

義原稿の閲読ができれば，彼の体系的な美学理解を解釈することができるであろう[9]。

5) ドイツ・ミュンヘン留学中に画家原田直次郎と知り合うが，鷗外は原田との交友を生前はもとより，直次郎の死に際しては追悼文「原田直次郎」を発表し，また原田直次郎記念会の事業を支援する。鷗外の原田に対する高い評価と敬意は何に由来するものなのか，そこに鷗外の芸術および芸術家観を探ることも重要な研究である。

以上のようなテーマを視野にいれて，我々の森鷗外「審美学」研究は続けられる。

[森鷗外の美学に関する文献]

森林太郎が，明治42年に文部省に提出した「文学博士候補者履歴書及著述目録」[10]には，「二，美学ニ関スルモノ」という項目があり，そこで挙げられているのは3点，つまり，原文をそのまま引くと次のようにある。

審美綱領　大村西崖共著　二巻　明治三十二年六月発行　○獨逸エヅワルト，フオン，ハルトマン氏「美学」ノ梗概
審美新説　一巻　明治三十三年二月発行　○獨逸ヨハンネス，フオルケルト氏「美学上時事問題」ノ全文訳
審美極致論　一巻　明治三十五年二月発行　○獨逸「オツトー，リープマン」氏「実相ノ分析」中美学ノ部ノ全文訳

なにゆえに上記3点のみを挙げ，「審美論」「審美史綱」「審美仮象論」などを入れなかったかについては推測するしかないが，おそらく，上記3点のみが単行本のかたちでも出版されているからであろう。「柵草紙」や「めさまし草」などに掲載されただけの著作は，「著述目録」に入れなかったのであろう。

とはいえ，実のところ我々もまた，何を基準に「美学的著作」として選別するかはむずかしい。総合的にはいずれ芸術関連の著作も考慮する予定であるが，本稿では，文学・演劇・美術などに関する評論の部類のものは別稿にまわし，比較的純粋に美学的な翻訳と著作を挙げることにする。

＜翻訳＞

全般的な注目すべき点：

1) 翻訳の原書はすべてドイツ美学関係であること。選んだ原著の鷗外自身の選択基準については，鷗外研究にあって現在までに論及されていない。中には，必ずしも当時のドイツ美学の代表者とは評価されないものも含まれていると言ってよいだろう。

2) 専門的用語の訳語は，すでに『哲学字彙』が，初版を井上哲次郎編により明治14年（1881）に東洋館から，再版が有賀長雄編により（井上哲次郎のドイツ留学のために引き継ぐ）明治17年（1884）に同じく東洋館から出版されているにもかかわらず，鷗外による訳語はそれらの成

果をふまえたものではなく独自のものであること。むろん,『哲学字彙』の成り立ちがW. Flemming: *The Vocabulary of Philosophy, Mental, Moral, and Metaphysical*, 1856, 1887. の見出し語に訳語をつけるかたちで制作されたので，ドイツ語の用語との対応は別の課題であったであろう。しかし，語彙としてそれほど差がないことは，鷗外であれば当然理解していたことであろう[11]。

3)〈aesthetics〉(ドイツ語であるから Ästhetik) の訳語として鷗外は一貫して「審美論」としていること。(『哲学字彙』では「美妙学」である。)

以下に挙げる訳述書，編述書について，次のような説明を加えておく。まず，[ ] に『鷗外全集』(岩波書店，昭和46年11月-50年6月) の巻数とページ数を記す (たとえば [21：1-3] は21巻の1ページから3ページということを指す)。原書の標題を挙げ，その後に，[ ] に東京大学総合図書館所蔵鷗外文庫の分類番号を記す。また原著者についてのかんたんな説明を *Brockhaus Enzyklopädie, Meyers Enzyklopädisch Lexikon*, そして竹内敏雄編修『美学事典増補版』(弘文堂) を参照して記すことにする。本稿の段階で「未調査」とあるのは，それらの事典類に当該人名項目がないからである。

各書の原著と訳書との比較対照は今後に必要な作業である。本稿では，「審美論」についてのみ試みた。とくに，専門用語の訳し方について注意すべきであろう。

「審美論」(明治25－26) [21：1-57]；初出「栅 (しがらみ) 草紙」

——翻訳原本：Eduard von Hartmann: *Ausgewählte Werke*. Band IV. Aesthetik. Zweiter systematischer Theil: Philosophie des Schönen. Leipzig: Verlag von Wilhelm Friedrich. 1887. [鷗外文庫 A100/1665]

原著者ハルトマン (1842-1906)：主著『無意識の哲学』(1869) によって一世をふうびする。ドイツ観念論の成果の集大成をめざし，ヘーゲルの理性概念と弁証法・止揚の思想，ショーペンハウアの意志の思想，シェリングの無意識の思想を統合し，さらにそれに自然科学的実証主義や帰納法を綜合しようとした。

——内容細目 ((鷗外による訳) および [筆者による試訳]，＜なし＞は鷗外による訳出がないことを示す)：

Erstes Buch: Der Begriff des Schönen.

Ⅰ. Der ästhetische Schein und seine Ingredienzien. [美的仮象とその要素]

1. Der ästhetische Schein [美的仮象]

a) Die Faktoren des Schönen (美の所在) [美の諸要因]

b) Die subjektive Erscheinung als Sitz des Schönen (美を擔ひたる主象) [美の場としての主観的現れ]

c) Die Ablösung des Scheins von der Realität (假象をして實を離れしむること) [仮象と現実との分離]

d) Die Aufrichtigkeit und Reinheit des ästhetischen Scheins（美象の誠と粋と）[美的仮象の真実と純正]

e) Die Idealität des ästhetischen Scheins（美假象の想なること）[美的仮象の理念性]

f) Schein und Anschauung（假象と観相と）[仮象と直観]

g) Schein und Bild（假象と圖と）[仮象と図象]

h) Schein und Form（假象と形と）[仮象と形式]

i) Das Verschwinden des Subjekts im ästhetischen Schein（主の美假象中に没する事）[主観の美的仮象への消失]

k) Die Arten des ästhetischen Scheins（美假象の種別）[美的仮象の種別]

2. Die ästhetischen Scheingefühle [美的仮象感情]

a) Die ästhetischen Scheingefühle im Unterschied von den realen Gefühlen（美假情の實情に殊なる事）[美的仮象感情と現実感情との区別]

b) Die Verwechselung und Vermengung ästhetischen Scheingefühle mit realen（美假情と實情との錯誤及混淆）[美的仮象感情と現実感情との混同と混淆]

c) Die Projektion der ästhetischen Scheingefühle in der Schein [美的仮象感情の仮象への投影] ＜なし＞

3. Die reale ästhetische Lust [現実的美的快] ＜なし＞

a) Die reale Lust am Schönen [美における現実的快] ＜なし＞

b) Die Selbstversetzung des Subjekts in's Objekt oder die ästhetische Illusion [主観の対象ないし美的幻象への自己転移] ＜なし＞

「審美新説」（明治31－32）[21：67–142]；初出「めさまし草」

――翻訳原本：Johannes Volkelt: *Ästhetische Zeitfragen*. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung. 1895. [鷗外文庫 A800/2]

原著者フォルケルト（1848–1930）：上記のハルトマンの影響も受け，主観的超主観主義を構想。美学的にはリップスの感情移入説を支持して思弁的美学と心理学的美学との総合をめざした。

「洋畫手引草」（明治31）[21：143–210]；森林太郎，大村西崖，久米桂一郎，岩村透 同撰，畫報社刊

――翻訳原本：K. Raupp: *Katechismus der Malerei*. 2. Aufl. Leipzig: Verlagsbuchhandlung von J. J. Weber. 1894. [鷗外文庫 F200/202]

原著者ラウプについては未調査

「審美綱領」（明治32）[21：211–350]；森林太郎，大村西崖 同編，春陽堂刊（上下2冊）

――翻訳原本：Eduard von Hartmann: *Ausgewählte Werke*. Band IV. Aesthetik. Zweiter systematischer Theil: Philosophie des Schönen. Leipzig: Verlag von Wilhelm Friedrich.

1887.［鷗外文庫 A100/1665］
――「審美論」と原本は同じ。
――未完に終わった「審美論」に代わって全巻の大要を編述したもの。
――後藤宙外による書評「. . . 又美学上の好訳語例を与へたるもの少なかざるを見る。例へば Teleology を志学，Purpose を準志，Mystio を密観体とせるが如き是れ也。」（「新小説」明治32年８月）
――高山樗牛は「太陽」明治32年８月号において本書を詳しく批評し，その中で鷗外の訳語を子細に検討して「従来の慣用訳語」と鷗外による「従来の用語例に依らざる訳語」とを対比している[12]。鷗外からの反論は後出の「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の書翰」（「讀賣新聞」明治32年９月１日，９月２日）と，「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の第二書」（「讀賣新聞」明治32年９月10日）において発表されている。

「審美史綱」（明治31頃）［21：357–383］；生前未発表
――翻訳原本：Max Schasler: *Kritische Geschichte der Aesthetik*. Grundlegung für die Aesthetik als Philosophie des Schönen und der Kunst. Abtheilung I. Von Plato bis zum 19. Jahrhundert. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung. 1872.［鷗外文庫 B800/19］
原著者シャスラー（1819–1903）：ヘーゲル学派の観念論を基本とする哲学を展開する。素材の醜は美がそれを通じて自己意識を持ち実現するための契機であると主張した。また，「同時的なもの」と「継起的なもの」との二つの対立原理を設定して，それに基づいてすべての芸術現象は分類されるとした。

「審美極致論」（明治34）［21：385–464］；初出「めさまし草」
――翻訳原本：Otto Liebmann: *Zur Analysis der Wirklichkeit*. Eine Erörterung der Grundprobleme der Philosophie. 3. Auflage. Straßburg: Verlag von Karl J.Trübner. 1900.［鷗外文庫 B100/115］
原著者リープマン（1840–1912）：カント研究者として新カント主義の基礎付けを企てる。

「審美假象論」（明治34－35）［21：465–496］；初出「めさまし草」
――翻訳原本：Karl Groos: *Einleitung in die Aesthetik*. Gießen: J. Ricker'sche Buchhandlung. 1892.［鷗外文庫 B800/11］
原著者グロース（1861–1945）：美的享受体験の核心を「内的模倣」（innere Nachahmung）の概念でとらえる。美について生物進化論をふまえて発生論的に追求する。芸術の享受は外的所与の内面的追形成（＝内的模倣）を意味すると考えた。

「情學は以て科學として立するに足るか」（明治35）［21：497–501］；初出「文藝界」
――原題：Ist Aesthetik als Wissenschaft möglich?

――翻訳原本：Heinrich von Stein: *Vorlesungen über Aesthetik*. Nach vorhandenen Aufzeichnungen bearbeitet. Stuttgart: Verlag der J. G. Cotta'schen Buchhandlung. 1897.［鷗外文庫 B800/21］

原著者シュタインについては未調査。西洋近代美学史についての目配りのきいた好著 *Die Entstehung der neueren Ästhetik*, 1886. の著者。

＜翻訳ではない美学的著作＞

「讀醜論」（明治24）［22：324–330］；初出「國民新聞」明治 24.3.8, 3.9, 3.10.

「醜美の差別」（明治24）［22：330–335］；初出「國民新聞」明治 24.3.14, 3.15, 3.16, 3.17.

「レッシングが事を記す」（明治24）［22：371–386］；初出「柵草紙」21号（明治 24.6.25), 22号（7.25), 23号（8.25), 24号（9.25）

「印度審美説」（明治29）［21：59–66］；初出「めさまし草」

「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の書翰」（明治32）［21：351–353］「讀賣新聞」9.1, 9.2

「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の第二書」（明治32）［21：354f.］「讀賣新聞」9.10

＜参考文献：鷗外の美学に関する研究抄＞

神田　孝夫「美学者としての鷗外」『国文学　解釈と鑑賞』昭和34年 8 月

同「森鷗外とＥ・Ｖ・ハルトマン」『島田謹二教授還暦記念論文集・比較文学比較文化』弘文堂, 昭和36年

小堀　桂一郎「森鷗外とＥ・Ｖ・ハルトマン」『日本近代文学の比較文学的研究』清水弘文堂書房, 昭和46年

同「鷗外の美学上の業績について」『鷗外全集』月報21（昭和48年 7 月), 岩波書店

同『森鷗外――文業解題　創作編』岩波書店, 1982

同『森鷗外――文業解題　翻訳編』岩波書店, 1982

佐渡谷　重信『鷗外と西洋芸術』, 美術公論社, 昭和59年

芳賀　徹『絵画の領分 ―― 近代日本比較文化史研究』朝日新聞社, 1984

土方定一「森鷗外と明治美学史」『浪漫古典』昭和 9 年（1934）7 月号

［注］

〈1〉 麻生義輝編『西周哲学著作集』岩波書店, 昭和 8 年, 序文（p. 2）

〈2〉 『奚服氏著　心理学』上冊, 文部省, 明治11年, p. 1f.

〈3〉 金田民夫『日本近代美学序説』法律文化社, 1990, p. 17

〈4〉 西周にあっても必ずしもそのような否定的見方が妥当するとは思われない。Cf. 拙論「実学としての美学 ― 西周による西洋美学受容」神林恒道編『日本の芸術論 ― その生成と変容』ミネルヴァ書房, 近刊予定

〈5〉 両者は共に津和野出身であり遠縁にあたる。鷗外は10才の時の明治 5 年に上京後西周の家に下宿する。また, 西を媒酌人として, 西のオランダ留学以来の友人の赤松則良の長女登志子と結婚する。（翌年には離婚してしまうが。）後年鷗外は「西周伝」を書いている。

〈6〉「なかじり」大正6年9月，『鷗外全集』（岩波書店）26巻所収

〈7〉『鷗外全集』（岩波書店）22巻，p. 27

〈8〉『鷗外全集』（岩波書店）22巻，p. 28

〈9〉 鷗外の東京美術学校での講義を聴いた学生のノートが発見されたが，いまだ出版されず，また私も閲覧の機会を持っていない。『朝日新聞』1989.12.21 夕刊，参照。このノートの出版を企画しているという明治書院に問い合わせたところ，諸般の事情で編集作業は軌道に乗っていないとのことである。

〈10〉『鷗外全集』（岩波書店）38巻，pp. 97-100

〈11〉 なお，『哲学字彙』はさらに明治45年に井上哲次郎，元良勇次郎，中島力造の共著であらたに『英独仏和哲学字彙』と標題も変えて丸善より出版されている。標題のように，この新版にはドイツ語フランス語の哲学用語も邦語訳の提示がされている。

〈12〉『樗牛全集』（日本図書センター，平成6年）第1巻，pp. 191-195

［本稿は1996年度本学研究所研究助成による成果の一部である。］

（原稿受理　1998年4月17日）